

本実践（研究）のポイント（高校教育指導課指導主事 宮本洋子）

本実践は、人生の最期のときにある患者の看護について、その人らしさを大切にしたい看護を実施するために、事例を用いて全人的苦痛のアセスメントを体験させることで、生徒が自ら課題を見つけ解決策を見出す探究的な思考を促すよう工夫された授業実践となっています。

また、既習の学習を事例と結びつけて概念化したり、グループワークなどの対話を通じて思考が深まる学びにつながるように工夫がなされています。

1 はじめに

人生の最期のときにある患者の看護では、生を支えつつ、一方で死を迎える過程を支えることを同時に行わなければならない。看護師は、患者の抱える全人的苦痛について理解し、苦しみをやわらげ、人生の意味や価値を見いだせるようなかわりを通して、その人らしく人生を生きることができるよう支援を行う必要がある。

2 問題の所在

看護を行う上では看護の対象であるその人らしさを大切にしたい看護のかかわりが重要である。実際に終末期にある人の関わりを身近に体験したことのない生徒が、その人らしく尊厳を持って生きることを支えた看護、すなわち、最期まで自己の生きてきた存在価値を深めていけるように支えるのと同時に、専門職として全人的苦痛をさまざまな側面からの確にアセスメントし、苦痛が軽減されるような援助を行う必要がある。そのアセスメントにおいて、患者の置かれている立場や状況を十分に把握し、倫理的問題への配慮も重要である。その人らしさを大切にしたい必要な看護を実施するための、適切なアセスメントを行うための実践能力を習得させることが課題である。

3 具体的な取り組み

- (1) 事前課題として終末期にある患者の事例を提示し、自身の死生観を見つめるとともに、看護の対象について関心を持ち、患者の状況について考えさせワークシートに記入させた。授業ではどの情報から、なぜそのようにアセスメントしたのか理由と合わせて発表させることで、患者の状態を整理し、自身にない視点に気付かせた。
- (2) 終末期における医療の現状や、既習した終末期の患者や家族の理解を深めるための考え方や概念について振り返ることで、その人らしさを大切にしたい必要な看護を実施するためのアセスメントを考えさせ、追記させた。
- (3) 個人で考えた意見をグループで共有し、グループごとに意見を整理させた。
- (4) グループで考えた意見を全体で発表させ、全体での考えの共有を図り、他者の考えと自分の考えを比較しながら考えることで、他者の意見から新たな視点を得ることの必要性も認識させた。

4 成果と課題

実際に終末期にある人との関わりを身近に体験したことのない生徒が、「人生の最後のときを支える看護」を実践するためには、死に直面した人々が死に至る過程や、患者と家族が何を大事にして生きてきたか、個人の持つ価値観や人生観等その個別性を理解する必要があるということを認識させた。そしてそれを踏まえ、事例を用いることにより、終末期の患者と家族の特徴や終末期における医療の現状、死を受容していく過程における、全人的苦痛のアセスメントを体験させ、必要な援助を考えていくことの重要性を理解させることができたと考える。また、必要な看護を実施するためのアセスメントを個人ワークとグループワークを行い考えさせたことで、生徒が多様な視点での考えを共有し、主体的に学習に取り組むことができたと考える。生徒の自己評価の項目で「自身の死生観を見つめるとともに、終末期の看護の対象について関心を持ち、倫理的課題について気が付き、多様な視点から考察することができた。」「終末期の看護の対象に合わせた看護とは何かについて理解を深め、対象に合った看護を適切に判断し、表現できた。」のどちらの項目も生徒全員がとても当てはまる、と答えている。また、学びとして「考えたことをグループと共有し、他の視点からの考えを知り、思考の深めることができた。」「様々な視点からアセスメントを行い、その人らしい最期を迎えられるよう支援していくことが大切だと改めて学んだ。」等記述している。このことから今回の学習目標を達成することができたと考える。課題として、生徒が主体的に対話的な深い学びができるように、これまで4年間看護を学んできたベースを活かした事例作成や授業づくりを行っていく必要がある。また、思考する内容を焦点化していくことが、生徒の思考を深めることにつながると考えられるため、どの部分を学ばせたいのかを授業者が明確にした授業づくりを行い、生徒一人一人の実践能力の育成を図る必要がある。

5 おわりに

今回の授業を通して、終末期における適切なアセスメントを行う実践能力を習得することができたと考える。また、発表や生徒同士で意見交換を行うことで他者の視点を自分に取り入れ、視点を広げることができた。今後も、患者に必要な援助を判断するために、自ら必要な情報を収集し、知識と統合して考え判断することのできる、実践能力の向上を図る授業づくりを行っていく必要がある。また、引き続き生徒が主体的に学んでいくことができるよう、どんな力を何のためにつけるのか、学ぶ内容を明確にした授業づくりを心掛けていく。